

2024(令和6)年度

鳥取県NIE実践報告書



教育に新聞を
Newspaper in Education

鳥取県NIE推進協議会

目次

●卷頭言「NIEは次代への投資！」	1
鳥取県NIE推進協議会	会長（広島経済大学准教授） 加藤 博和
●2024年度鳥取県NIE実践指定校の報告	
①義方小学校の取り組み	2
米子市立義方小学校	教諭 瀧脇 悠花
②鳥取中央育英高等学校の取り組み－図書館からの実践を続けて－	7
鳥取県立鳥取中央育英高等学校	司書主任 前田久美子
③NIE実践報告書	11
青翔開智中学校・高等学校	教諭 池田 夏暉
●第29回NIE全国大会・京都大会 概要	15
●第29回NIE全国大会・京都大会に参加して	19
改めてNIEの役割考える	
鳥取県NIE推進協議会アドバイザー 岩井 克之	
情報社会を生きるために	
米子市立義方小学校教諭 瀧脇 悠花	
新聞が持つ可能性を実感	
鳥取中央育英高等学校司書主任 前田久美子	
学んだ内容を実践に還元	
青翔開智中学校・高等学校教諭 中澤 歩	
●鳥取県NIE推進協議会 会則	21
●「出前授業」「ゲストティーチャー」のご案内	23

NIEは次代への投資！



鳥取県NIE推進協議会会長

加藤 博和 広島経済大学准教授（前米子高専教授）

2024（令和6）年度の実践校は、義方小と鳥取中央育英高（前年度からの継続校）、青翔開智中・高の3校です。教育に新聞を活用するNIEがそれぞれの学校現場でどのように展開されたのか—その取り組みや活動に私たちは学ばせていただき、NIEを継承・発展させていきたいと思います。

ゲストティーチャー授業は新聞記者が授業者としてではなく、ゲストとして教室に招かれて、授業者である学校の教諭とコラボレーションして行われる方式で、今年度も多数実施され、定番化した感があります。9月に桜ヶ丘中（3年生）、10月に鳥取西高（2年生）、1月に青翔開智中（3年生）・高（1年生）で当協議会の新聞社・通信社が講師となり、それぞれの個性や持ち味も反映したユニーク授業がそれぞれの教室で展開され、アクティブラーニングで盛り上がった様子が想像できます。8月には鳥取中央育英高でも1年生の読書教室で当協議会事務局長が新聞の読み方をレクチャーしています。

授業を報じた新聞記事を拝見すると、生徒たちは新聞の様々な役割や面白さに気づき、「記事は人の手で書かれている」、「新聞にはきちんと裏取りした正確な情報が載っている」と新聞への理解を深めていました。

また、桜ヶ丘中と鳥取西高は実践校の指定期間が終わってもNIEに継続して取り組んでいただいていることをうれしく思います。

鳥取県の人口は全国で最少ですが、逆に言えば、一人ひとりに投入できるリソース（資源）は相対的に大きくもなります。学校・教育関係者、新聞社・通信社・当協議会事務局各位のご理解とご協力に感謝いたします。顔の見える“鳥取型”的NIEが着実に展開されていることにさらなる期待を込め、こうした関係性をさらに強く太いものにしていただきたいと思います。

私事ながら、会長に就任して4回目の巻頭言になります。この間の実践指定校は、岩美高、会見小、桜ヶ丘中、湯梨浜学園中・高、鳥取西高、義方小、鳥取中央育英高、青翔開智中・高で、校種や先生方のバリエーションもあり、NIEの可能性や豊かさをいつも感じます。

当協議会としてホームページを開設し、県NIE推進セミナーも開催しました。NIE全国大会への参加（当協議会事業として派遣）では、島根県NIE推進協議会をはじめ他県の皆さんと交流するなどして連携を図りました。こうした媒体や企画・機会を通じて、情報共有や発信を引き続きお願いしたいと存じます。

私は職場が高専から大学に移りましたが、引き続き授業（地域経済分野）で新聞を活用しています。受講学生のアンケート（良かった点）に「新聞記事を読み、広島の転出超過やひろし[広島の食品会社のふりかけの商品名]、島根の原発等、地域に関する知識を増やせた」、「新聞を読む習慣が少し付きました」というものがあり、手ごたえも感じたところです。

新聞記事で知ったニュースや、出合った話題が、就職活動の武器になったり“雑談力”になったりする、と授業で話しています。新聞は自分への投資としても有益です。

そして、小・中・高（大学も含めて）の学校や家庭・地域で培われた学力やスキルを持つ一人ひとりが、地域社会や政治・経済の重要な担い手となり、“リターン”となります。NIEへの積極的投資を勧めたいと思います。

義方小学校の取り組み

米子市立義方小学校 灘脇 悠花

1 はじめに

本校は、2023（令和5）年度より2年間のNIE実践校としての指定を受けた。1年目となる2023年度は、児童の実態を知ることから始めた。新聞との関わりや、文字を読むことについての意識調査を実施し、まずは児童が新聞に親しむことができるよう取り組んでいった。2年目となる2024年度には、本校の校内研究であったICTの活用を取り入れながら、新聞を効果的に活用していくことを目指して取り組んだ。

2 実践内容

（1）校内の取り組み

特別教室の一画に「NIEコーナー」を設置し、休憩時間等に自由に新聞を読むことができるようとした。



新聞社ごとに新聞を並べ、興味に応じて読み比べられるようにした。同じ日の新聞でも、一面に取り上げている記事が違っていたり、同じ事柄を取り上げた記事でも、見出しや写真、文章の内容が違っていたりすることに気付くことができるようにした。NIEコーナーについては、校内放送で紹介し、全校に周知した。興味をもった児童が足を運び、新聞を手に取る姿が見られた。また、過去の新聞もストックしておくことで、教師が学習教材として使用できるようにした。



(2) 各学年の取組

①○○探し（1～3年生）

1年生では、新聞記事の中から、学習して読めるようになったカタカナや漢字を見つけ、丸をつける活動を行った。カタカナや漢字を学習してすぐの1年生は、新聞に載っている多くの文字の中から、自分に読めるものを見つけていくことに、とても喜びを感じていた。

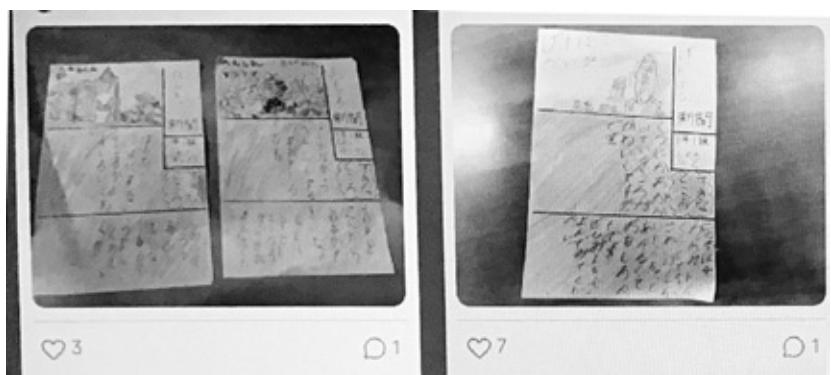
2年生では、文字探しだけでなく、写真探しに取り組んだ。新聞に載っている写真について友達に進んで伝える姿も見られた。

3年生では1人ずつ1日分の新聞を手に取り、新聞の中の大きな数を探した。見つけた数字には赤い○をつけていった。見出しだけでなく、本文にもしっかりと目を通し、兆をこえる大きな数を見つけた児童もいた。



②新聞で表現する（1年生）

1年生の国語「むかしばなしをたのしもう」「すきなはおなしはなにかな」では、自分の好きな話を新聞形式でまとめて紹介し合う活動を行った。自分が特に伝えたいことや好きな場面を短く分かりやすく書く意識をもつことができた。また、ペアやグループで紹介し合うだけでなく、全員が書いた新聞を写真に撮り、タブレットにあげることで、それぞれの新聞を見合うことができた。



③日本海新聞「みみちゃんプレス」の活用（4年生）

4年生の国語「くらしの中の和と洋」では、和と洋について自分たちで調べ、新聞でまとめて発表する活動を行った。調べる際に、ウェブサイト「みみちゃんプレス」を活用した。新聞から必要な情報を選び取り、分かりやすく表現しようと話し合う姿が見られた。



④ NIEワークシートの活用（4年生）

NIEのウェブサイトに掲載されているワークシートの中から、児童の実態に合わせた分かりやすい内容のものを選んだり、児童が興味をもちそうな記事を題材としたものを取り上げて学習したりすることができた。また、本校で取り組んでいる活用力の育成を目的とした一斉テストにおける「活用問題」として取り入れることもあった。



⑤ 朝の帯時間を活用した取り組み（5年生・6年生）

新聞の記事の中からお気に入りの記事を選んで要約したり、班の人と共有したりするなど、10分間という限られた時間の中で取り組むことで、読み取る力を高めることにつながると期待する。

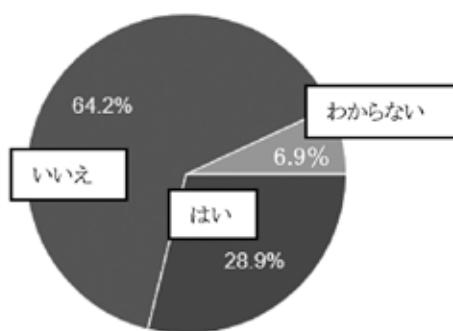


4 成果と課題

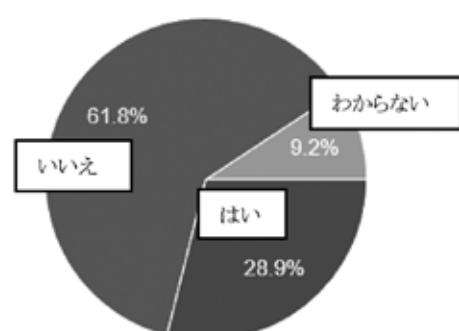
NIEの取り組みの成果と課題を振り返るために、児童にアンケート調査を行い、NIEの取り組み前後の結果を比較した。

○新聞を読みますか？

〈取り組み前〉

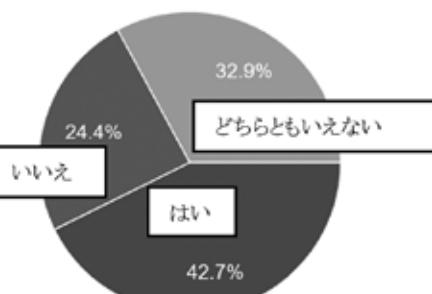


〈取り組み後〉

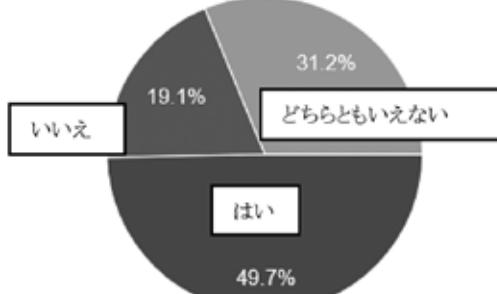


○文章を読むことは好きですか？

〈取り組み前〉

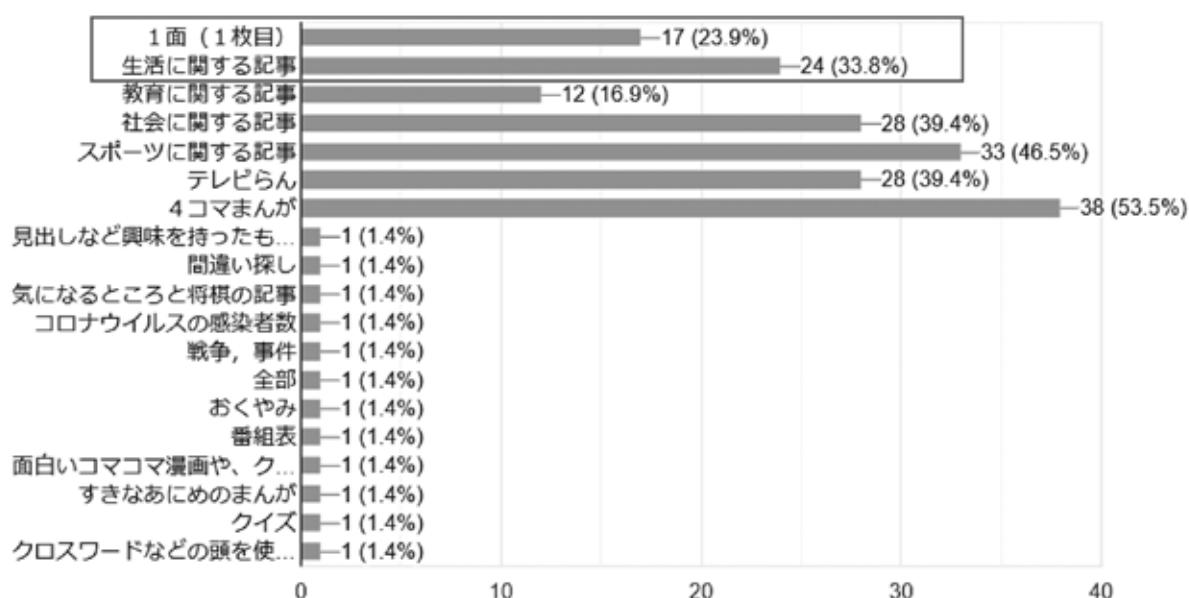


〈取り組み後〉

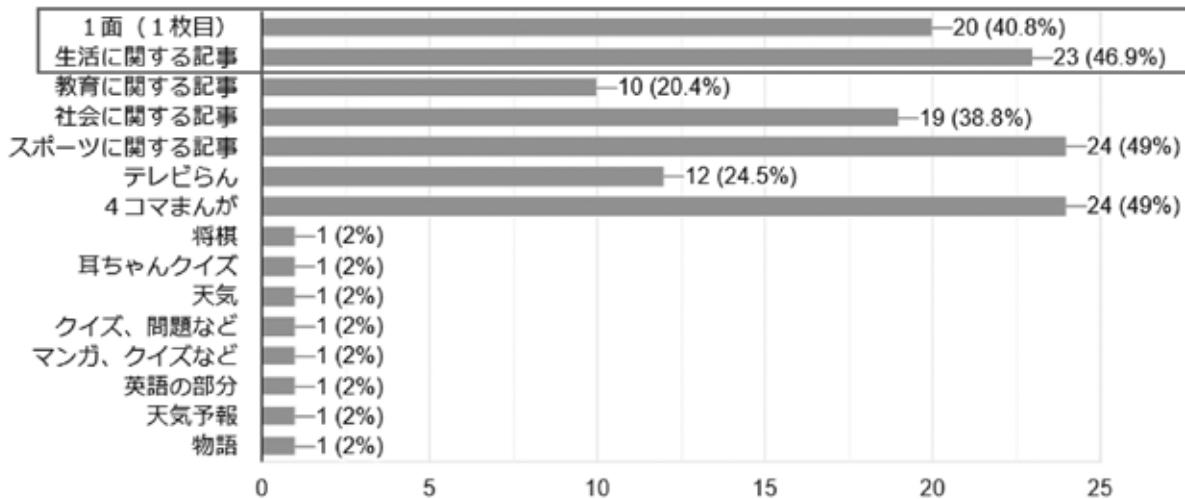


○どんな記事を読みますか？

〈取り組み前〉



〈取り組み後〉



NIEの取り組みをした結果、「新聞を読む」と答えた児童の割合は変わらなかつたが、「どんな記事を読むか」という質問に対して「一面を読む」と答えた割合が23.9%から40.8%、「生活に関する記事」と答えた割合が33.8%から46.9%と数値が上昇した。さらに、「文章を読むことは好き」と答えた児童の割合は42.7%から49.7%と上昇した。このことから、NIEの実践を重ねたことにより、新聞が児童にとって身近なものになり、興味・関心が高まってきたのではないかと言える。また、新聞に親しむことにより、文章を読むことへの抵抗感もある程度減少したのではないかと考えられる。

今後の課題として、アンケートの結果から数値が上昇している項目は見られるが、全体で見ると半分に満たない部分があるのが現状である。NIE実践校としての取り組みは終わるが、今後も児童が興味・関心をもって学習に取り組んだり、読み取る力を高めたりしていくために、学年に応じて新聞活用を続けていきたい。

鳥取中央育英高等学校の取り組み —図書館からの実践を続けて—

鳥取県立鳥取中央育英高等学校
司書主任 前田 久美子

1 はじめに

本校は2023（令和5）年度に実践指定校に認定され、今年度で2年目になる。これまでも、前身の由良育英高等学校時代を含め数回実践指定校に認定されてきているが、今回は2007～2008（平成19～20）年度以来の、15年ぶりの実践指定校への認定となった。

2 実践事例

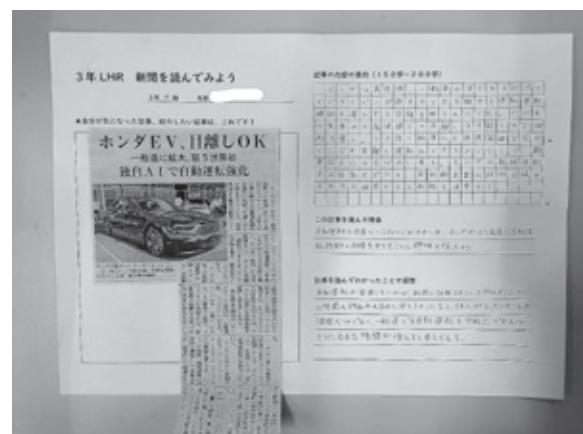
（1）新聞活用LHR（全学年対象）

普段あまり手に取ることがない新聞を通して時事問題や地域の話題等に触れる目的として、2022（令和4）年度より実施している。今年度は、1年生は各クラス1回（1月）、2年生は未来探究類型・社会探究類型・スポーツ探究類型の3類型に分かれて2回（5月、2月）、3年生は各クラス1学期に1回・2学期に3回の計4回実施した。3年生については入試や就職試験等の進路に関する動きが本格化することに伴い、実施回数を他学年よりも増やしている。

最寄りの大栄販売店から実施日に当該学年の生徒・教職員分の当日分の日本海新聞本紙を届けていただき、クラス毎（2年生は類型別）にワークシートとともに配布し、担任主導で実施している。生徒は気になった記事を選んでワークシートに貼付、内容の要約及び感想等を記入する。記事選びや要約に苦戦することもあるようだが、新聞を活用したインプット及びアウトプット作業を実践する好機となっている。



LHRの様子



作成したワークシート

（2）生徒玄関に新聞設置・「本日の一面」掲示

実践指定校への新聞6紙の無償提供を活用し、提供を受けた9月から12月の間、生徒玄関横に専用のラックを設け当日の新聞を設置し自由に閲覧・読み比べができるようにした。また、当日の各紙の一面上半分をカラーコピーしたものを合わせて生徒玄関横に掲示、一面トップの記事を気軽に確認できるようにした。

生徒たちは思いのほかよく見ている様子が見受けられた。中でも入試を控えた3年生が時事問題対策のため日々内容を確認している様子があった。また、今年度は就職試験解禁の時期にも合わせたことでより効果的な活用につなげることができた。

教職員からの評判も上々で、一面の掲示については「ずっと続けてほしい」との要望もあったため、提供期間の12月末以降も本校で購読している日本海新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の4紙については引き続き一面の掲示を継続している。



（3）1年生「読書教室」

本校では、読書活動等の意義を今後の高校生活の中で自己実現や進路実現に効果的につなげていくことを目的に、1年生を対象に毎年「読書教室」という図書館主催の行事を実施している。2023（令和5）年度からは、本校がNIE実践指定校になったことを受け、新聞活用を通して読解力や情報活用能力の向上を目指した内容で実施している。

今年度は8月28日（水）7限に、県NIE推進協議会の松田博美事務局長を講師にお迎えし、新聞の役割や各面の構成と特徴、効率的な読み方や新聞に限らず情報収集をする際に気をつけるポイント等を伺いながら、全員に配布された当日分の日本海新聞本紙を実際に読んで確認し、各々の学びを深めた。生徒や教職員による質疑応答も活発に行われ、生徒・教職員ともに学ぶことの多い有意義な取り組みとなった。



講演の様子



実際に新聞を広げて記事構成等を確認

(4) 授業や進路指導での新聞活用

NIE実践指定校としての前述の取り組みを進める中で、図書館だけが実践の拠点になるのではなく、現代文講読（3年・国語科）や時事問題理解（3年・地歴公民科）の授業等、新聞活用に理解のある先生方による授業での活用も定着していった。

また、進路相談室でも新聞記事の提供や活用を促す取り組みがなされた。どの進路を希望する場合も社会情勢や時事的な動きへの興味関心と情報収集能力、自分の希望する分野の今日的課題の把握は必要になるので、そこに新聞が効果的な役割を果たした。もちろん図書館でも、小論文や面接対策として新聞の活用を促し記事の提供等を実施した。

(5) 読者投稿欄への応募

今年度、新たな取り組みとして目標としていたことに「読者投稿欄への生徒の作品の投稿」があった。3年生の論理国語の授業の中で「高校生活を振り返って伝えたい感謝の気持ち」をテーマに約400字の文章を作成し、うち5名の作品を日本海新聞の読者投稿欄に応募し、3月13日から15日にかけて「若者の声」として全員を掲載していただいた。

応募のタイミングが遅く生徒が卒業した後の掲載となってしまったが、校内だけでなくさまざまなところからの反響があり、掲載された生徒の保護者からの感謝の声も寄せられ、改めて新聞という媒体の影響力を実感できる取り組みとなった。

(6) 各種新聞記事の掲示（本校関連記事、地域に関する記事）

本校に関する全ての新聞等の記事及び北栄町に関する主な新聞記事について収集・保存し、本校関連記事については図書館前の専用掲示板に掲示をしている。

特に各種大会・試合の結果や講演会等の学校行事に関する記事は生徒や教職員の関心も高く（記事になる前に「取材を受けた」と教えてくれる生徒や先生もいる）生徒たちに新聞を身近に感じてもらう大きなきっかけ作りになっているのではないかと思う。

また、地域の課題等の記事も教室棟に専用掲示板を設けて掲示し、本校で取り組んでいる地域探究や、地域理解の一助とした。



（7）新聞記事データベースの活用促進

本校では長年、朝日新聞社のデータベース「朝日けんさくくん」を契約、利用しているが、これまであまり積極的な利用はされてきていたなかった。しかし、今年度の入学生をもって生徒が全員Chromebookを所有し活用できる環境が整ったことにより、校内であればChromebookからも「朝日けんさくくん」の利用ができるように設定し、主に3年生に対して図書館で操作方法の説明を実施し、進路指導と連携して活用を呼びかけた。

3 図書館を拠点としたNIE実践への所感

実践指定校のお声掛けをいただいたきっかけが後述の新聞活用LHRであり、その企画・実践の中心となっていたのが司書である私だったことにより、本校は司書が実践代表者を担当した。授業実践の主体になることがない、ましてや学校教育の専門家でもない者が実践代表を務めることには大きな不安があったが、「高校図書館に勤務している図書館の専門職としての立場で、できそだと思えることに少しずつでも取り組んでいこう」という思いで、2年間取り組みを進めてきた。

幸い、理解してくださる先生方も増え、特に3年生については進路実現に向けての新聞活用の重要性が浸透していき、学年・進路相談室・図書館と校内のいろいろなところでアプローチができる体制ができたことが収穫となった。

4 2年間を終えて

最近は新聞を購読している家庭が減少し、生徒たちは日常的に新聞に接する機会が減少している。しかも、新聞を購読している家庭で過ごしている生徒でさえ「新聞は父母や祖父母が読んでいるもの」として捉える傾向がある。その中で、日常の新聞記事掲示に加えて全ての学年に対してLHRや行事等を通して新聞に触れる機会を複数回設け、生徒たちに新聞の持つ社会的役割や情報収集・活用における利点を感じてもらうことができたのはよかったです。

また、実践指定校の活動を通して、他の教職員との連携協力を広げていくことができ、始めた当初は「図書館が何かやってる」という雰囲気であったのが少しずつでも学校全体で「新聞活用は大事なことだから全体で連携協力して取り組んでいこう」という体制の構築に繋がつていったことが大きな収穫であった。

しかし、振り返るともう少し多くの教職員と具体的な連携協力ができなかったのか、通年で取り組むような事例が他になかったのか、生徒がもっと主体的に取り組める活動はできなかつたのか…と、私自身の力不足と余裕のなさが引き起こした反省・後悔も多々ある。しかし、実践指定校ではなくなても「NIE活動」自体が終わるわけではない。今後も引き続き取り組めることは取り組んでいき、できるところから少しずつでも活動の幅を広げていけたらと思っている。

NIE実践報告書

青翔開智中学校・高等学校
池田 夏暉

1 学校としての取り組み

①朝Newsの時間

本校では、中学3年生から高校3年生にかけて、毎週木曜の朝8:30～8:40の10分間を「朝Newsの時間」として設定し、その活動の中でNIE（Newspaper in Education）を推進している。

中3、高1では、公民科、地理総合、歴史総合の授業に沿って教員がテーマを設定し、10年前と現在ではそのテーマの扱われ方がどのように違うか、また新聞社によってどのように違うかなどを考察した。

高2では「総合的探究の時間」における生徒個々の課題研究が始まるため、そのテーマに沿った活用をし、また卒業後の進路を想定したテーマも扱った。



図 1

②新聞コーナー

新聞は、生徒の登校動線上に配置し、自然に手に取ってもらえるようにした。目につきやすく、立ち止まって読みやすい高さや場所に配慮することで、新聞に触れる機会の増加を図った。



図2新聞配置の画像



図3 中3生徒が見ている様子

2. 実践事例

① 教科・科目・領域

教科：社会科（歴史総合）

学年：高等学校1年生

単元：歴史総合（帝国書院）「第4部 グローバル化と私たち」

授業時数：4時間

② テーマ

「『問い合わせ』から学ぶ近現代の見方・考え方」

～現代の諸課題の歴史的基盤を探る～

新聞記事を活用し、現代の課題（パレスチナ問題）を素材に、生徒が「疑問」から「問い合わせ」を立てるスキルの育成をねらいとした。歴史的文脈と現代のニュースを結び付け、複数視点からの理解と考察力を育むことを目的とした。

③ 展開・評価

- グループで新聞記事を読み、キーワードや気になった内容を整理
- 「疑問の持ち方」を参考にしながら、疑問を洗い出す
- 各自分が関心のある疑問を深掘りし、歴史的観点から問い合わせを立てる
- 最終的に、問い合わせとその背景を発表・共有

④ 授業展開の工夫（抜粋）

- 導入：「4コマ漫画」で“問い合わせ”とは何かを直感的に捉えさせた
- 資料選定：ガザ地区に関する新聞一面を活用し、時事性の高いテーマを選定
- ツール活用：F i g J a mを活用し、グループで疑問を可視化・分類
- 支援：効果的な問い合わせの例を示し、「なぜ・その裏に何が？」といった探究の視点を提示
- 評価：ループリックにより、問い合わせの質と深まりの度合いを評価



図4,5 生徒の成果物（新聞記事に直接疑問を書き込み）

3. 実践後の変化・感想・今後の課題

① 生徒の変化

- 新聞を「ただ読むもの」から、「問い合わせを立てる素材」として捉える意識の変化が見られた
- ガザ問題に対し「死者や人質が多く心が痛んだ」「新たな興味が生まれた」など、共感や内省の反応も多く、思考・感情の両面に変化あり
- 「物事を多面的に見る力」「情報を疑う視点」など、メディア・リテラシーの向上も確認された

② 生徒の感想（抜粋）

- 「今回の授業では、新聞に書かれた情報を理解するだけではなく、理解した上で疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことをまとめました。批判的に読み解く力や問い合わせの生成力を身につけました。今後も情報を分析、活用する際に意識して、より良い情報収集を行いたいです。」
- 「新聞を批判的に読むことは毎日新聞を読む中で続けていきたい。また個人探究でも疑問を見出す力が必要になってくると思うので、個人探究でも活かしたい。また疑問点を自分で調べるまで行動に繋げることとか自分から調べていくことは続けて行きたい。」
- 「今後探究で色々な情報をを集め分析し疑問を立てると思うがそのプロセスでいかに情報を取捨選択するか疑問を立てるかなど問題提起、アイディア創出に活かせると思う。(特に疑問レベルチェックシート)」

③ 教員としての気づき・反省

- 新聞という身近だが普段あまり使われないメディアを学習素材としたことで、生徒の興味喚起に繋がった
- 疑問を言語化する支援をもっと手厚くすることで、問い合わせの質がさらに高まる可能性がある
- 「問い合わせ」の質に差が出たため、今後は問い合わせの分類や深掘り方法のガイドを明示したい

④ 今後の課題・展望

- NIEを単発で終わらせず、学期ごとのテーマ探究に組み込むことで継続性を高める

第29回

NIE全国大会京都大会

探究と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす





2024年
8月1日(木)／ロームシアター京都
8月2日(金)／京都経済センター

日時
会場

【主催】日本新聞協会
【共催】京都府教育委員会、京都市教育委員会
【後援】文部科学省、日本NIE学会、文字・活字文化推進機構、全国学校図書館協議会、理想教育財団、京都府公立高等学校長会、京都府公立中学校長会、京都府小学校長会、京都府私立中学高等学校連合会、京都府私立小学校連合会
【主管】京都府NIE推進協議会、京都新聞社

1日目

8月1日(木) 開会式・全体会

会場 | ロームシアター京都 メインホール

12:00	受付／開場
13:00～	歓迎公演 六斎念佛踊り 京都中堂寺六斎会・京都市立光徳小学校児童
13:30～	開会式
13:50～	基調講演「刷り物の字が教えた日本」  硫田道史（いそだ・みちふみ、歴史家・国際日本文化研究センター教授） 略歴：1970年岡山市生まれ。慶應大大学院文学研究科博士課程修了。博士（史学）。茨城大助教授や静岡文化芸術大教授、国際日本文化研究センター准教授を経て、2021年4月から現職。専門は日本近世史。著書は「近世大名家臣団の社会構造」「無私の日本人」「感染症の日本史」「日本史を楽く」「歴史のミカタ」「徳川家康 弱者の戦略」「家康の誤算」など多数。NHKBSプレミアム「英雄たちの選択」の司会を長く務めるほか、10年に著書「武士の家計簿」が、16年には「無私の日本人」1編目の「鍋田屋十三郎」が「殿、利息でござる！」のタイトルでそれぞれ映画化。18年に大河ドラマ「西郷どん」の時代考証も担当するなど、多方面で活躍している。豊富な知識と明るい語り口で歴史を立体的かつ表情豊かに解説、世代を問わざるファンが多い。
	休憩
15:20～	基調提案 横本祥夫 大会実行委員長 会場のみんなでミニ「まわしよみ新聞」ワーク ※いつのどの新聞でもいいので、参加者は各自1部ずつご持参ください
	パネルディスカッション 「きょうを読み、あすを解く（NIEの歴史と可能性）」 【進行役】宮澤 之祐 （日本新聞協会NIEアドバイザー、元京都府・市中学校社会科教諭、元神戸新聞記者） 【登壇者】林 潤平 （京都市学校歴史博物館学芸員、京都先端科学大学・京都女子大学など非常勤講師） 長澤 江美 （スマートニュース メディア研究所研究員、インターネットメディア協会リテラシー部会） 神崎 友子 （京都教育大学附属桃山中学校主幹教諭、日本新聞協会NIEアドバイザー）
17:00～	日本新聞協会 NIE 学習効果調査の報告 次回開催地主管社・神戸新聞社あいさつ

※開場時間中（12:00～18:00）、全国の新聞社によるデジタルサービス、NIEやリテラシー教育に役立つ教材や書籍の展示・紹介コーナーを開設

2日目

8月2日(金) 分科会・ポスターセッション・企画展・全国NIEアドバイザー会議

会場 | 京都経済センター内
2F京都産業会館ホール、3・6・7F各会議室

8:20	開場	
9:00～	分科会 第1部	<div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; display: inline-block;"> 9:00～14:00 発表交流 (ポスターセッション、企画展) 2F 京都産業会館ホール 中室 </div>
10:30～	休憩	
11:00～	分科会 第2部	
12:45～	閉会式 2F京都産業会館ホール 北室	
14:00～	全国NIEアドバイザー会議 2F 京都産業会館ホール 南室	

※大会参加者はアドバイザー会議を傍聴できます

2日目

8月2日㊈ 分科会プログラム

※大会終了後に一部を動画配信予定です（敬称略）

第1部 【9:00～10:30】

A 京都のNIE史
特別分科会
発表者：林潤平（京都市学校歴史博物館学芸員）
木村信造（京都府立田辺高等学校教員）ほか

B 比べよう！探ろう！新聞の効果的な伝え方
小学校公開授業
京都市立御所南小学校 4年
科目：観察の時間 授業者：森川亞里沙 教諭

C 難民、戦争… 視点を変えて考える未来
中学校公開授業
八幡市立男山東中学校 1年
科目：社会科 授業者：志村五郎 教諭

D 多様性を問う 新聞記事のジェンダー表現
中・高校公開授業
京都先端科学大学附属中学校高等学校 中学3年、高校1・3年
科目：論理国語 授業者：伊吹侑希子 司書教諭

E 読み書き交流する「デジタル新聞」
小学校実践発表
京都教育大学附属桃山小学校
科目：国語科、社会科、メディア・コミュニケーション科
発表者：井上美鈴 教諭

F SDGs視点で今を捉え「自分ごと」発信
高校実践発表
京都府立東宇治高等学校
科目：総合的な探究の時間、進路指導 発表者：小林未来 教諭

G 地理探究×新聞記事で現代社会にアプローチ
高校実践発表
京都市立塔南・開達高等学校
科目：地理探究 発表者：中村顕 教諭

H 子ども新聞、子ども記者活動
特別分科会
発表者：京都各地・全国各地の子ども記者や経験者たち

I 「対話×デジタル」新聞を活用した文学作品の読み
中学校公開授業
京都市立西京高等学校附属中学校 2年
科目：国語科 授業者：矢倉裕也 教諭

J 原子力災害の今・自分事として考えるということ
中学校公開授業
京都女子中学校 3年
科目：探究 授業者：湯浅美穂 教諭

K 取材力、表現力を伸ばす「新聞」フル活用
小学校実践発表
京都市立羽束小学校
科目：国語科、社会科、総合的な学習の時間
発表者：古田祐子 教諭（研究主任）、河内雄策 教諭、廣岡希美 教諭

L 地域で取材・交流「柏原平和池水害」と私たち
小学校実践発表
亀岡市立群徳小学校
科目：総合的な学習の時間 発表者：東哲平 教諭

M 新概念を提示「売れる新聞」児童が考案
小学校実践発表
AIC国際学院京都初等部
科目：探究（Inquiry） 発表者：田口直也 教諭

N 「オピニオンタイム」
中学校実践発表
綾部市立八田中学校
科目：総合的な学習の時間、国語科、図書館教育
発表者：船越寿子 教諭

O 染め、社寺、スポーツ…「探究京都」を新聞で発信
高校実践発表
京都府立豊学校高等部
科目：総合的な探究の時間 発表者：橋本尚也 教諭

【9:00～14:00】

発表交流

2F京都産業会館ホール 中庭

◆ポスターセッション

NIEに取り組んでいる人、進めていこうとしている人、アイデアや手法を持っている人やグループが説明し、参観者の助言や感想、質問を受けて対話で深める双向の交流の場。発表者の応募は6月末まで。

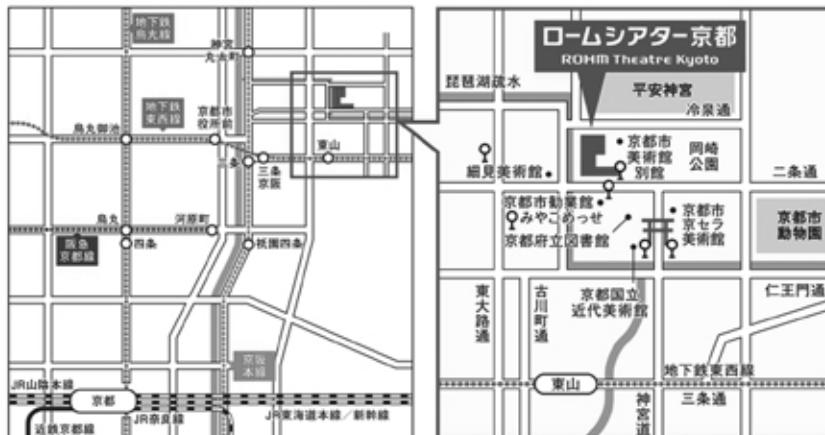
◆企画展「多様性 メディアが変えたもの メディアを変えたもの」

ニュースパーク（日本新聞博物館）が2023年4月～8月に開いた企画展の一部を抜粋して展示。大会実行委員会とニュースパークの共催による今回の巡回展は、京都の教育実践も含め、ジェンダーに関わる内容を中心に展示。

※大会の開催行事として、上記「多様性」企画展の一部巡回展は8月5日（月）～30日（金）に世界人権問題研究センター（京都市下京区下之町、京都市立芸術大学A棟7階）でも、同センター共催で開催します。平日の10:00～17:00

会場案内

● ロームシアター京都 (京都市左京区岡崎最勝寺町13)



JR京都駅から

Access

- 京都市営地下鉄東西線「東山」駅下車 1番出口より徒歩約10分
- 市バス32・46系統「岡崎公園ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
- 市バス5・86系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車徒歩約5分
- 市バス31・201・202・203・206系統「東山二条・岡崎公園口」下車徒歩約5分

● 京都経済センター (京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町78)



Access

- 京都市営地下鉄烏丸線「四条駅」北改札出てすぐ
- 阪急電車京都線「烏丸駅」26番出口直結

参加申込

【受付期間】5月20日(月)～6月30日(日) 7月15日(月)まで延長

【参加費】

教育関係者・一般 2,800円
京都府内の教育関係者・一般 1,000円

【お申し込み方法】

NIE全国大会京都大会専用サイト
<https://nie-kyoto.com/>



【大会プログラム・発表に関するお問い合わせ】

大会実行委員会事務局(京都新聞社内)

TEL.075-241-5289(受付時間 平日10:00～17:00)

日本新聞協会 新聞教育文化部NIE担当

TEL.03-3591-4410(受付時間 平日9:30～17:30)

【参加・宿泊申込に関するお問い合わせ】

大会実行委員会事務局(京都新聞企画事業株式会社内)

TEL.075-213-8130(受付時間 平日10:00～17:00)

第29回NIE全国大会・京都大会に参加して

大会スローガン：探求と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす

(2024年8月1、2日・京都府京都市)

改めてNIEの役割考える

■鳥取県NIE推進協議会 アドバイザー 岩井 克之



今大会は、京都府内各地の学校の実践発表や公開授業だけでなく「ポスター・セッション」部門も新設され、他県の実践を聞くことができた。新聞とICTを活用し、対話や協働を通して自らの考えを再構築し、発信する実践が多く見られた。

パネルディスカッションで、「ネット情報と新聞の情報との違いが分からない子どもが増えている」という発言があった。ネット情報は速くて便利であるが、間違った情報をそのまま拡散して社会問題となる事件が増えている。正しい情報を選択する力を身につけることが急務である。記者の目や取材を通して確かな情報を配信する新聞を基に学ぶNIEの果たす役割は、大きいと改めて感じた。

社会問題や地域の話題といった信頼のおける記事が網羅された新聞は、子どもの興味・関心の「種」の宝庫である。新聞を基に対話や協働を通して学ぶことで、情報の質を見極める力を身につけてほしい。

情報社会を生きるために

■米子市立義方小学校教諭 瀧脇 悠花



情報過多な社会を生きていく子どもたちが必要な力をつけていくためには、NIEという取り組みはとても重要であると感じた。たくさんの情報の中から必要な情報を選択したり、自分の考えを表現したりしていくことで、問題を多面的に捉え、見方・考え方を広げるとともに、自分の考えを明確化することができる。

さらに、新聞を通して記事を書いた相手や友だちと対話をすることができ、多様性を尊重する態度を養うことにつながるということが分かった。また、「新聞は新しく一定吟味された情報であり、『生きた教科書』」だという言葉が印象に残った。

新聞を効果的に活用することで、子どもたちが「今」を知り、自分事と捉えることができる。そうすることで、自分の考え方や行動が変わり、社会も少しずつ変わっていくのだと感じた。こうした素晴らしいNIEの取り組みの楽しさ・喜びを私も子どもたちと味わえるよう、一緒に取り組んでいきたい。

新聞が持つ可能性を実感

■鳥取県立鳥取中央育英高等学校司書主任 前田 久美子



「探究と対話を深めるNIE」を掲げた今回の大会。分科会にて探究活動における情報収集や思考判断の材料としての記事活用の事例と、探究活動を校内外に広く発信する目的で取り組みを新聞の形にまとめた事例の発表から、新聞を介して「探究」の中で教職員と生徒が「対話」を深めていくことの意義を学ぶことができた。

また、ポスター SESSION では、学校だけでなく図書館など多様な場面での新聞活用について 50 を超える団体が実践発表されていた。それぞれの「探究」事例と参加者同士の「対話」の展開、熱気にあふれた会場で多くの学びを得るとともに、NIE 活動の奥深さと間口の広さに感心した。

「情報を得る手段」や「考える材料」、「表現・発信の方法」としての活用、あるいは「ものづくり」の素材としての活用など、実にさまざまな新聞の活用そして NIE 活動の形がある。新聞が持つ多種多様な可能性を改めて実感した。できるところから少しづつでも今後の実践に生かしていきたい。

学んだ内容を実践に還元

■青翔開智中学校・高等学校教諭 中澤 歩



第29回NIE全国大会に参加させていただき、さまざまな校種の実践報告や公開授業に加え、新聞を活用した学びについてのシンポジウムなどを通して、NIE実践に生かすことのできる知見を得ることができた。

本年度のテーマである「探究と対話を深める」学びを進めていく際には、生徒によって知りたいと思う内容が分かれていくことが多い。各自が持った疑問や関心を大事にし、異なるテーマをそれぞれ調べるときには、やはり紙の新聞に加えてデータベース検索を組み合わせることが有効だろう。

調べて見つけた記事をもとに考えて次の問い合わせを生み出すことは「探究」につながり、持ち寄った記事をもとに議論することで「対話」が促進される。実践報告や公開授業でも、教員が提示する記事と、生徒自身が調べた記事がうまく組み合わされていた。

今回の全国大会で学んだ内容を本校のNIE実践に還元し、新聞を活用することで探究的な学びをより充実させていきたいと考えている。

鳥取県NIE推進協議会 会則

(目的)

第1条 鳥取県NIE推進協議会（以下、協議会という）は、NIE（Newspaper in Education）の略称にちなみ、教育界と新聞界が協力し、新聞を生きた教材として活用し、現代社会に対応した情報能力を育成する教育を進めていくことを目的とする。

(事業)

第2条 協議会は前条の目的を達成するため次の事業を実施する。

- (1) NIE実践校・実践者を日本新聞協会に推薦すること。
- (2) NIE実践校・実践者への研究補助に関すること。
- (3) NIEに関する研究会を開催すること。
- (4) NIE実践・研究成果の紹介や普及に関すること。
- (5) そのほか必要と認めたこと。

(構成)

第3条 協議会は次に掲げる者で構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 鳥取県教育委員会
- (3) 市町村教育委員会教育長会
- (4) 鳥取県小学校長会
- (5) 鳥取県中学校長会
- (6) 鳥取県高等学校長協会
- (7) 鳥取県私立中学高等学校長会
- (8) NIE実践指定校
- (9) 日本新聞協会
- (10) 朝日新聞社鳥取総局
- (11) 毎日新聞社鳥取支局
- (12) 読売新聞社鳥取支局
- (13) 日本経済新聞社鳥取支局
- (14) 中国新聞社鳥取支局
- (15) 山陰中央新報社鳥取総局
- (16) 新日本海新聞社
- (17) 共同通信社鳥取支局
- (18) 時事通信社鳥取支局

(役員)

第4条 1、協議会に次の役員を置き、総会で会員の中から互選する。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 幹事 若干名

(4) 監 査 2名

2、役員の任期は事業年度の期間とする。ただし再任は妨げない。

3、役員の任務は次の通りとする。

(1) 会長は協議会を代表し、会務を総括する。

(2) 副会長は会長を補佐し、会長が欠けたときは副会長の1名が職務を代行する。

(3) 幹事は会務を処理する。

(4) 監査は会計を監査する。

(総会)

第5条 1、協議会は、事業計画そのほか運営に関する重要な事項を決定するため毎年1回定期総会を開くほか、次の場合に開催する。

(1) 事業の実施状況の報告。

(2) 会長が特に必要と認めたとき。

2、総会は会長が招集し、その議長となる。

(委員会)

第6条 特定事項について検討審議するため、委員会を置くことができる。

(経費)

第7条 協議会の運営に関する経費は、会員新聞社・通信社の拠出金および個人、団体などの補助金、その他の収入を充てる。

(事務局)

第8条 協議会の事務局は新日本海新聞社内に置く。

(事業年度)

第9条 協議会の事業年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

(補足)

第10条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。この会則に定めのない事項は、会長の承認を経て委員会に諮り決める。

(付則)

1 会員新聞社・通信社の拠出金は当面、新聞社が1社年額6万円、通信社が1社年額3万円とする。

以 上

「出前授業」 「ゲストティーチャー(GT)」 のご案内

鳥取県NIE推進協議会は、県内の小中高校を対象に新聞記者を講師として派遣する「出前授業」および「ゲストティーチャー(GT)」を行っています。

出前授業は、新聞を教材として「新聞の基礎知識」「新聞の読み方」「新聞編集」「新聞記者の仕事」などについて授業を行うほか、新聞記事の作成体験などを通して、児童生徒に知識や技術を伝えていきます。GTでは、通常の教科の時間に記者がゲストとして訪れ、先生と一緒に授業を行います。

※内容は一部変更となる場合があります。



出前授業およびGTのお問い合わせ・お申し込み

鳥取県NIE推進協議会事務局(新日本海新聞社読者センター内)

電話 0857(21)2877(9:30~17:00、土日祝除く)



教育に新聞を
Newspaper in Education

発行2025年6月25日

鳥取県NIE推進協議会

事務局

〒680-8688 鳥取市富安2丁目137番地
(新日本海新聞社読者販売局販売部読者センター内)
TEL 0857(21)2877 FAX 0857(21)2891